

ハタオリマチ - 織物の町

富士吉田市は、その、1000年を超える織物生産の中心地、ハタオリマチとしての伝統を活用しています。10世紀に編纂された、法律や行事の定めを記載した延喜式では、この地域の気候や高度により、一般的に年貢として納められていた米の生産が難しかったため、税金を絹で支払わなければならなかったことが記載されています。

江戸時代の繁栄

江戸時代（1603-1868）は、数世紀続いた戦いの後、日本に平和をもたらし、日本の首都、江戸では商人や職人からなる裕福な中産階級が台頭しました。この中産階級は、17世紀中頃に豪奢禁止令が施行されるまで、派手な服装などでその富を贅沢することで表現しようとしていました。法律により衣類の色が茶色や灰色のような淡褐色に限定されていましたが、江戸の人々は裏地がその法律で規制されていなかったという抜け道を見つけました。カラフルで、優美な裏地の需要が急上昇しました。富士吉田では染め物師が富士山のきれいな湧水を使って鮮やかな色に染め上げた絹が特に珍重されており、富士吉田の織物産業が繁栄しました。

富士吉田は、江戸時代が終わった後も、長年にわたって繊維製品の中心となっていました。1950年代から1970年代の日本の「奇跡の経済成長」が、需要をかつてないほどに押し上げました。この時代では、織機をガチャっとするだけで1万円儲かると言われたガチャマン景気という面白い言葉が生まれました。

大手ブランド

富士吉田は、評判のいい原材料の納入元から大手消費者ブランドとその姿を変えました。織物製造会社の多くは「オープンファクトリー」を毎月第3土曜日に開催しており、ここでは来訪者が稼働中の織機を見学することができます。デザイナーや学生とのコラボレーションが、ブックカバーから寝具までの多様なここでしか手に入らない特産品を生み出しました。

富士吉田市は、2016年には第1回のハタオリマチフェスティバルを開催しました。今では毎秋開催されるようになったこのイベントでは、展示、音楽の演奏や特別ゲストを迎えたパネルディスカッションなどにより職人と商人が協力して富士吉田の織物をプロモーションしています。メイン会場は小室浅間神社と本町通りですが、富士吉田中の工場や店舗がこのイベントに参加しています。